

旧呉鎮守府の赤レンガ倉庫群の建設年代について

光井 周平*・上寺 哲也**・難波 宗功***・白数 夏生***

(令和元年10月31日受付)

Construction Age of Red-Brick Warehouses in the Former Kure Naval Base

Shuhei MITSUI, Tetsuya UEDERA, Tokikatsu NAMBA and Natsuo SHIRASU

(Received Oct. 31, 2019)

Abstract

The former Kure Naval Base is one of important base of the Imperial Japanese Navy before the end of the World War II. A lot of buildings and structures were constructed by the Navy around Kure city and some of them are now remain. Inside of present site of Headquarters of Kure District, Japan Maritime Self-Defense Force (JMSDF), there are many historic buildings which constructed before the end of the WWII and red-brick warehouses which remained in the base are one of it.

In this paper, it is certified that three red-brick warehouses at JMSDF Kure base have built in 1900 by using some historical photos and documents. Several cracks in brick wall are found and it is clarified that the cracks are occurred by an earthquake in 1905. This brick buildings have historical value and it is needed to be conserved as cultural properties for the future.

Key Words: Red-Brick, Warehouse, Kure Naval Base, The Imperial Japanese Navy

1. はじめに

現在の呉市周辺地域には、太平洋戦争が終結する1945年までの期間に旧日本海軍によって建設された建築物や土木構造物などの海軍関連の遺構が数多く残されている。代表的なものとして、呉市に残る明治38(1905)年竣工の旧呉鎮守府司令長官官舎や明治40(1907)年竣工の旧呉鎮守府庁舎(現在の海上自衛隊呉地方総監部第一庁舎)、対岸の江田島市に残る明治26(1893)年竣工の旧海軍兵学校生徒館(現在の海上自衛隊幹部候補生学校庁舎)などが挙げられる。こうした建築物は、地域の歴史遺産として観光資源等にも活用されている。近年では、日本遺産に認定されるなど、その価値が広く認識されている。

一方、戦後進駐軍の管理を経て海上自衛隊の施設として活用されているものも多く、現在も現役で使われている建

築物もある。自衛隊施設という特殊な状況下に置かれていることにより、これまで十分な調査・研究が行われておらず、一般にもあまり知られていない施設も少なくない。こうした建築物の歴史的価値を明らかにすることは、今後の保存や利活用を考える上で非常に重要である。

本報では、そのような施設の一つである海上自衛隊呉基地内に残されたレンガ造の倉庫群について、文献調査ならびに実測調査により、これまで考えられてきたよりも建設年代が古く、明治期に建設された貴重な建造物であることが明らかとなったので報告する。

2. 旧呉鎮守府の赤レンガ倉庫群について

現在の海上自衛隊呉基地には、前述の旧呉鎮守府庁舎のほか、鎮守府が開庁した明治22(1889)年に建てられた旧文庫測器事務所(現在の海上自衛隊呉地方警務隊本部庁舎)

* 広島工業大学環境学部建築デザイン学科

** 呉工業高等専門学校機械工学分野

*** 呉工業高等専門学校専攻科プロジェクトデザイン工学専攻

や建設年代は不明であるが昭和2（1927）年以前には建てられていた旧呉海軍艦船部（海上自衛隊呉造修補給所庁舎）など、戦前に建てられた多くのレンガ造建築物が今なお現役で使用されている^{文献1）-3）}。

今回調査を実施したレンガ倉庫群もその一つであり、現在は同一形状の3棟が残っている。戦後に復員庁第二復員局（戦時中の海軍省の後継組織であり1946年に設置された海軍関係の復員業務を担当する部局）が作成した『呉海軍軍需部引渡目録』に掲載されている建物配置図を写真1に、調査対象のレンガ倉庫部分を拡大したものを写真2に示す。昭和19（1944）年時点での建物配置が示されており、上述のレンガ倉庫は図中の「第七庫」「第八庫」「第九庫」に該当する。現在はそれぞれ「31 倉庫」「32 倉庫」「33 倉庫」と呼称されているが、本報では便宜上「第七庫」「第八庫」「第九庫」の呼称を用いることとする。

現在の第八庫を西側から撮影した写真を写真3に、第九庫の二階より東側を撮影した写真を写真4に示す。建物内部は長手方向が約35.5m、短手方向が約8.2mであり、レンガ造の総二階建てで切妻の屋根が架かっている。約4mおきに設けられた外壁のバットレスが特徴的である。



写真3 第八庫の外観を西側より見る



写真4 第九庫二階より東側を見る

内部の小屋組を写真5に、二階床の梁組を写真6に示す。小屋組は木造の真東小屋組（キングポストトラス）であり、レンガ造の壁上に整然と並んでいる。二階床の梁組は木造の平行弦トラスであり、引張力が作用する箇所には鋼製部材を用いている。

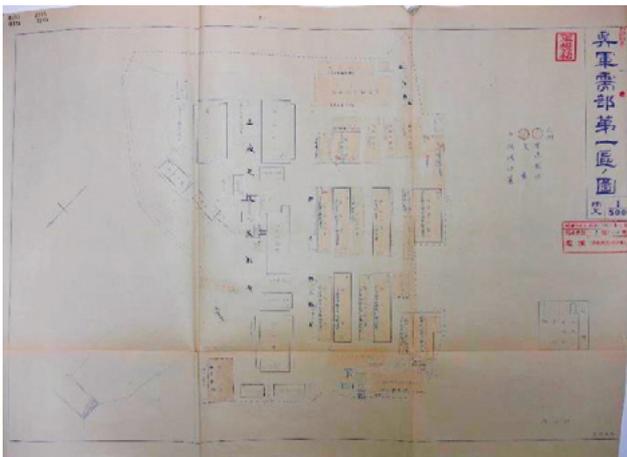


写真1 昭和19年時点の建物配置図⁴⁾



写真5 小屋組の木造トラス

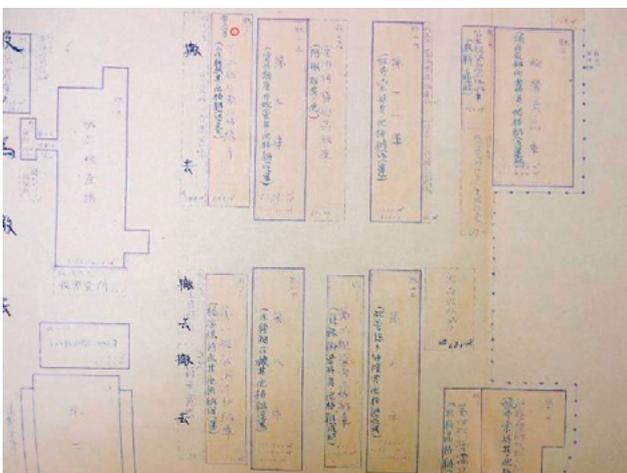


写真2 写真1のレンガ倉庫部分拡大



写真6 二階床の梁組（平行弦トラス）

3. レンガ倉庫群の建設年代の検証

3.1. 英連邦占領軍が撮影した写真による検証

海上自衛隊が保管する台帳には、これらのレンガ倉庫群は昭和5（1930）年に登録されているが、写真7に示す昭和21（1946）年に当時に中四国地域の占領統治を担っていた英連邦占領軍（British Commonwealth Occupation Force、以下BCOFと称す）が撮影した写真にレンガ倉庫群が現在と同じ場所に写っており、戦時中にはすでに存在していたことが分かる。

また、写真7では空襲で焼失している屋根が、同じくBCOFが撮影した写真8では確認でき、昭和21（1946）年から昭和25（1950）年の4年間の間にBCOFによる修繕がなされて、現在の形になったものと考えられる。なお、写真7及び写真8には現在のレンガ倉庫群の特徴的な外壁のバットレスが確認できるほか、写真8では手前側のレンガ倉庫の外壁に丸印が描かれているのが確認できる。同様の印は現在も写真9に示すように残されており、こうした類似点から、これらBCOFが撮影した写真のレンガ倉庫群が現存するレンガ倉庫群と同一であると考えても矛盾しない。



写真7 1946年にBCOFが撮影した写真^{注1)}



写真8 1950年2月にBCOFが撮影した写真^{注1)}



写真9 第八庫の外壁に描かれた丸印

3.2. 明治芸予地震の被災写真による検証

国立科学博物館地震資料室のホームページ⁵⁾では、明治芸予地震で被災した建築物の写真が公開されている。この地震は、明治38（1905）年6月2日に発生した安芸灘を震源とする地震であり、呉地域では当時の震度区分で最も大きな揺れである「烈震」を記録している。旧海軍関連の建築物も大きな被害を受けており、前述の旧呉鎮守府司令官官舎や旧呉鎮守府庁舎は、この地震の被害を受けた後に新たに建設し直されたものである。なお、明治22（1889）年に建てられた初代の呉鎮守府庁舎は、明治芸予地震の被災後も二階建を平屋建に改築して使用され続け、戦後は呉地方総監部第二庁舎として使用されていたが、昭和56（1981）年に解体撤去されて惜しくも失われてしまった。

さて、前述の地震資料室で公開されている写真の中で、「需品庫煉化二階倉庫」と示されている建物の外観が現存のレンガ倉庫群と酷似していた。そこで、今回の調査では、明治芸予地震の被災写真に残されたレンガ壁のひび割れ等の損傷がレンガ倉庫群に残っていないか確認を行った。

写真10は、公開されている写真の中で「需品庫煉化二階倉庫 東北側壁封角線状亀裂」と注釈が記載されたものである。中央に写る外壁のバットレスに大きな亀裂が確認できるほか、左下の一階窓の右上部分へつながる外壁のひび割れが見える。写真11に示すのは、現在の第八庫の東北側に確認された外壁及びバットレス部分のひび割れである。写真10と11を比較すると、バットレス部分のひび割れが完全に一致することが分かった。また、バットレスから左下の一階窓へとつながるひび割れについても、ほぼ一致した。

このように、明治芸予地震の際に発生したと思われるひび割れが現在の第八庫に確認をされたことにより、地震が発生した明治38（1905）年6月の時点でこれらの建築物がすでに存在していた可能性が高まった。参考までに、同じ



写真10 東北側壁封角線状亀裂^{注2)}

く「需品庫煉化二階倉庫」の被災写真として公開されている写真12から写真14を示す。今回の調査ではこれらの写真で確認できるひび割れと同様のものを現在のレンガ倉庫群で確認することはできなかったが、今後の調査で引き続き確認を試みたい。

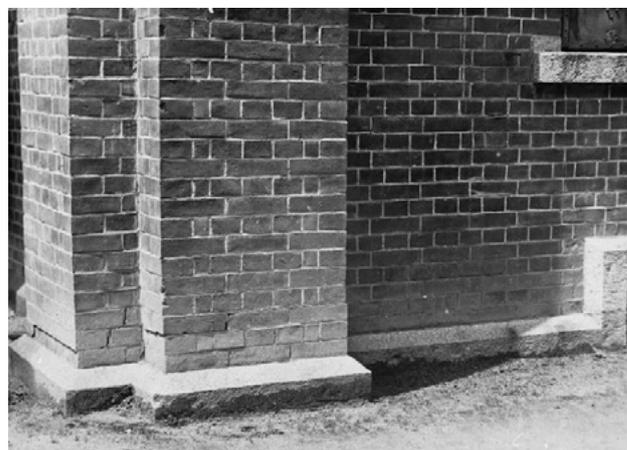


写真12 東角柱形移動^{注2)}

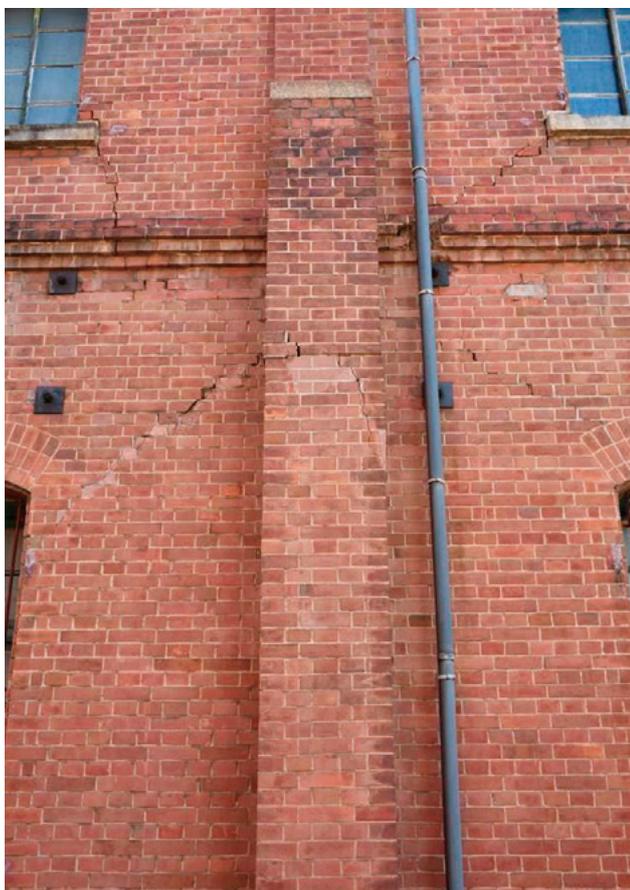


写真11 第八庫東北側の外壁及びバットレスのひび割れ



写真13 東北側壁封角線状亀裂^{注2)}



写真14 東北側壁封角線状亀裂 (47) ノ外部^{注2)}

なお、国立科学博物館地震資料室ホームページには他にも旧海軍関連の建築物の被災写真が公開されているが、その中に「需品庫煉化平家倉庫」と記載されたもの（写真15参照）もある。同じく平屋建で近くに現存するレンガ造の建築物として、現在の海上自衛隊呉地方総監部施設課事務所がある。この建物もレンガ倉庫群と同様に海上自衛隊の台帳には昭和5（1930）年に登録されている。写真16に施設課事務所の現在の写真を示す。窓上のアーチ状の部分を基準としてひび割れの位置を確認すると、写真15と写真16とで窓左側上部から軒下へと伸びるひび割れがほぼ同様であることが確認できる。こうしたことから、施設課事務所の建物の建設年代についても、明治38（1905）年以前である可能性が考えられる。

3.3. 史料による検証

呉市史編さん室が所蔵する史料の中で昭和19（1944）年に呉海軍軍需部が作成した建築物の目録⁶⁾が残されており、その中で「第七庫」「第八庫」「第九庫」の竣工年月は明治33（1900）年4月と記載されている。この目録は文献4）と同時期に作成されたものであり、建物群が軍需部第

一区の敷地内に所在している点や建築物の用途、構造、階数、各階の面積などの記載内容が一致している。

なお、この目録には「第一庫」の竣工年月が明治33（1900）年2月と記載されているが、文献4）と現状とを比較すると「第一庫」は前述の施設課事務所に該当する。

4. まとめ

本報では、海上自衛隊呉基地内に残るレンガ倉庫群を対象に、文献調査ならびに実測調査により、その建設年代を検証した結果について報告した。

これまでは、海上自衛隊の台帳に記載されている昭和5（1930）年が建設年代とされてきたが、今回の調査の結果、二階建のレンガ倉庫群（「第七庫」「第八庫」「第九庫」）は明治33（1900）年4月、平屋建の施設課事務所は明治33（1900）年2月であることが明らかとなった。こうした事実は、BCOFが戦後に撮影した写真との比較や、明治38（1905）年に発生した明治芸予地震により発生したひび割れが現在も残っていることから裏付けられた。

呉市に残る旧海軍関連のレンガ造建築物としては、明治40（1907）年竣工の旧呉鎮守府庁舎を筆頭に、明治38（1905）年に建設された旧呉海軍工廠造兵部第九工場（現在のダイクレ呉第二工場）や明治30年代に建設された昭和町のレンガ倉庫群などが知られているが、今回調査を行ったレンガ倉庫群がこれらと比較しても高い歴史的価値を有することが確認されたと言える。旧呉鎮守府の歴史を考える上でも大変貴重な遺構であり、今後の保存・活用が期待される。

一方、写真17に見られるように、老朽化に伴う損傷が各所で進行していることも確認された。建設されてから約120年の歳月を経る中で、明治芸予地震や平成13（2001）年に発生した芸予地震など数多くの地震などにも耐える中で、徐々に損傷が蓄積して現在に至っている。



写真15 需品庫煉化平家倉庫 東北側壁亀裂^{注2)}

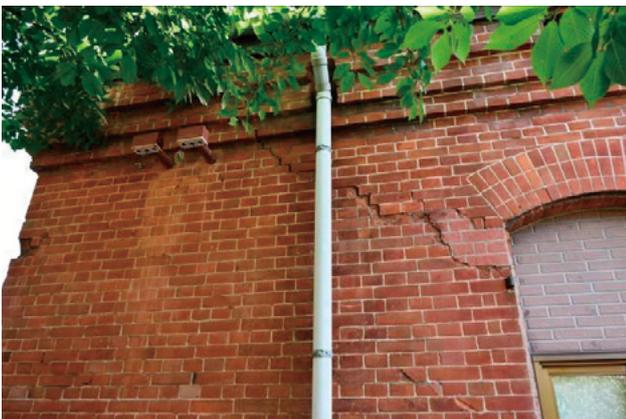


写真16 現在の施設課事務所東北側壁面のひび割れ

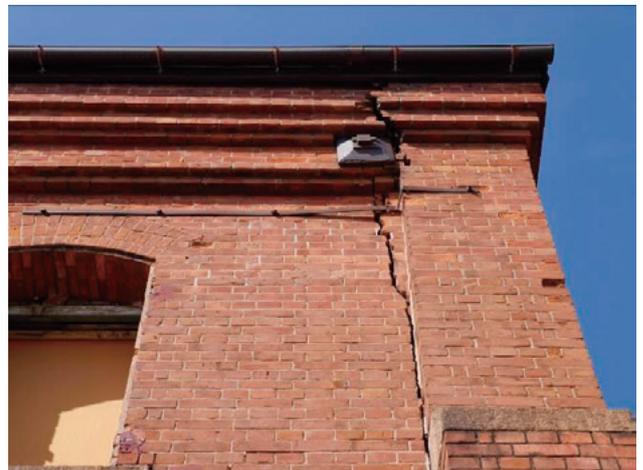


写真17 現在の第九庫南西隅の外壁ひび割れ



写真18 補強のために設置されたと思われる鋼棒

写真18に示すように、過去に補強を目的として設置されたと思われる鋼棒など、対策も一部でなされているが、現時点での外壁の変形状態を考えると、実際の補強効果は乏しいものと考えられる。

旧海軍、そして戦後はBCOF、海上自衛隊の施設として使い続けられて今日に至るレンガ倉庫群は、明治期以降の呉の歴史を考える上で貴重な遺産と言える。今後も次世代へと引き継がれていくことが望まれるが、そのためには構造的な補強対策が急務である。今後は、他のレンガ倉庫の補強、活用事例を参考にしながら、適切な補強方法の検討を行いたいと考えている。

謝 辞

本報に示した調査の実施に際しては、海上自衛隊呉地方

総監部の協力を得た。また、呉市海事歴史科学館（大和ミュージアム）学芸課の学芸員・花岡拓郎氏より資料の提供ならびに助言を得た。ここに記して感謝の意を表す。

脚 注

注1) 写真提供：オーストラリア戦争記念館

注2) 写真提供：国立科学博物館

文 献

- 1) 呉レンガ建造物研究会編：街のいろはレンガ色—呉赤レンガ考—、中国新聞社（1993）
- 2) 防衛施設技術協会編：自衛隊施設内の歴史的建造物（明治・大正 編）（2005）
- 3) 防衛施設技術協会編：自衛隊施設内の歴史的建造物（昭和 編）（2006）
- 4) 呉海軍軍需部：呉軍需部第一区ノ図、昭和十九年四月調 営造物及機械位置等ノ図、JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C08010915500、呉海軍軍需部 引渡 目録3／3（防衛省防衛研究所）
- 5) 国立科学博物館理工学研究部理化学グループ：明治芸予地震、国立科学博物館地震資料室、https://www.kahaku.go.jp/research/db/science_engineering/namazu/（2019年10月1日参照）
- 6) 呉海軍軍需部：昭和十九年四月一日調 営造物及機械 目録（呉市史編さん室所蔵）